

いずめりの里だより

第4号

一年に一度のロマンス、七夕

働き者であった織姫と牽牛（彦星）が結婚をし、あまりにも仲むつまじく、仕事がおそろかになってしまった二人に怒った天帝（神様）が、二人を天の川で隔てて引き離し、年に1度だけ再会を許したというのが七夕の伝説です。織姫が機織など女性の手習い事に長けていたため、習い事の上達を祈願する短冊などの七夕飾りが広まったと言われています。

現在の新暦である7月7日は、梅雨のさなかでなかなか星空を見るのが出来ません。また運良く晴れたとしても月の満ち欠けが毎年異なるため、満月前後では月明かりが強すぎて星が見えにくくなってしまいます。ところが旧暦の七夕（今年は新暦の8月7日）は、梅雨が明けているうえに、月がまったく見えない新月から7日目と定義しているため、月明かりの影響をあまり受けずに星空観賞ができます。

東の空に一番明るく輝く星が織姫（琴座のベガ）、その右下に彦星（鷲座のアルタイル）、その間を隔てるように淡い光の星の集団、天の川が流れています。さらにベガとアルタイルの左には白鳥座のデネブがあり、その三つの星をつなげると「夏の大三角形」となりますので、これを目安にすると比較的見付けやすいです。

七夕の日に雨が降ると天の川が増水し、二人が再会できないと言われるのが、それにはご心配なく。二人を哀れんで無数のカササギが飛んできて、自分の体で橋を作って天の川に架けてくれるのだそうですよ。七夕の日に雨が降ったら、願いを叶えてもらうためにも、カササギさんの応援をしてあげましょう！



五色の短冊は自然界を象徴する中国の五行説からきており、青は木が成長する様子、赤は火のような灼熱の性質、黄は土が万物を育成する性質、白は金属のように冷徹・堅固な性質、黒（靑じま紫）は泉から湧き出る水で、胎内と靈性を兼ねそろえるという意味がそれぞれにあるという。

7月7日は「そらめんの日」七夕にそらめんと食べると大病しないと、平安時代の書物に書かれているのだとか。

